

遙か向こうの空の彼方から

★ ^{En D En C G D D7} 少しだけ冷たい空気

^{En D En C D G G Aug D7} 少しだけやさしい空気★★

^D 遙か向こうの空の彼方から ^{En D G}

^{D G D G} 季節変わる風がやってきた

^{D En D En} 夏の名残 窓かに抱え

^{D D7 En D D7} 街をそっと撫でる

^{En C} 気づいた時 もうそこには

^{D G B7} 楽しい日々 置き去りにされ

^{D G} 誰かを呼ぶのでなく

^{C D En} 何かを忘れたまま

^{G Aug C D} 季節のこの扉をたたき

^{C Aug G D G} その風ただ通り過ぎる

^{C Aug G D G C Aug En D En} これから訪れる 秋の気配が

★～★★

人々の影 細く揺らして

どこか遠い記憶 運してくる

夕暮れ ひとしずく 混ぜたような

輝き 夏ふたの裏に

気づいた時 もうそこには

この心だけ 置き去りにされ

誰かを 探すのでなく

何かを 忘れたまま

この季節の扉をたたき

ただ その風は 通り過ぎる

秋の始まりを そっと受け止める

★～★★

中秋の月

★ 過ぎゆく季節の
痛み感じて
そっと撫でる手のように
やさしく照らす

風のな... 空気まとして
月はゆっくりと満ちされて
薄い雲一筋
レース越しのように

どこか遠い昔の月々の
気配含んでいるような月が
あの頃にできなかったことを
そっと集めて教えてくれる

こんなにも 暖かく
怖いほど 眩しくて

★～★★

道端のススキ 光受けて

銀の羽を開き

その影までもやさしく

揺らす風と共に

どこか遠い昔の月々の

気配含んでいるような月が

あの頃に言えなかったことを

そっと集めて慰めてくれる

こんなにも 暖かく

怖いほど 眩しくて

★～★★

千変万化

5 0 Bm 7

目の前に起きることとめどなく

移ろいゆく慌ただしさの中に

良いこと悪いことおまわりごと突然のこと

新しいニュースが"ぎ"と消えてゆく

その中でくつきり飛び込んでくる

テレビに映る開ける人たちの顔

それ見ながら感じるエアコンの涼しい風

その時の時間をゆっくりと震わせる

0 F#m Bm
夕方の陽射し5
部屋の隅 薄い光を落し0 5 0
くつきりの中でF#m 7 5 0
自分の今日の自分を忘れる

ようやく自分のかたち取り度す

消えるものと残るもののあいだで

この心いつも小さな揺らぎを抱え

立ちとまる時間の大切さを感じる

変わる速さに直いついていなくても

見つめる気持ちには確かにここに残して

やがて来る夜

天井のあたり強くなって

くつきりの中で

自分の今日の日が終わっていく

素直に いえなくて

* ただ素直に「ありがとう」とだけ
 いうことでよかったはずなのに なせか
 ただ照れくさかっただけで いえない **

何気なく見える親切に
 お礼いうほどのことではないと
 なせか勝手に決めつけて
 間違っていたことに気付く

「お礼はなくていい」
 というのを決めるのは相手
 どちらが勝手に
 決めるのはいけないうこと

* ただ素直に「ごめんなさい」とだけ
 いうことでよかったはずなのに なせか
 ただ照れくさかっただけで いえない **

ふとかけてしまう 迷惑に
 お詫いいうほどのことではないと
 なせか勝手に決めつけて
 間違っていたことに気付く

「お詫いはなくていい」
 というのを決めるのは相手
 どちらが勝手に
 決めるのはいけないうこと

(*~**)

(*~**)

Capo. 3 オ-7=D
Capo. 5 1-7=L Am

Dm

月の世界

Am F#m 5. 0 Bm F#m 5. 0
Am Em Dm C Am Em Dm C

* いとけうらに 老いもせすなし
思うこともなくはべるなり
誰かが憧れる 世界には遠いぞい **
死なずに死ぬがに 悔むこともなく
永遠に生きているのか

終わりがあろう人は頑張れる
頑張ることから悩み生まれる
清らかなままで 老いることもなく
生きていたいのは そうだぞ

いとおい悲しと

おぼれつることもうせぬ

全てを消し去ってくれる天のはころも

恨みや妬が なくなる代わりに

執着や愛も 生まれないのか

愛があるから人は頑張れる

頑張りが終わった次の苦しみ

怒ることなく悲しむことなく

生きていたいのは そうだぞ

(* ~ ** くりかえし)

Capo. 2 ホーソンド

E

思い出 胸の中に

D Em G D D Em G D

D Bm G D D Bm G A
少し長くなってきた 夕方の影にEm G D Bm Em G D
記憶までも冷やす 季節の終わりG D Bm Em G D A
いつの間にか 途切れた 笑いの中でG D Bm Em G D A
思い出 胸の中に 残ってD G Em D
まぶしい 夏 この日の光D G Em A D
心の奥のどこか 貼り付いたまま

Em D Bm A Em D Bm A

風は どこか 冷たく 袖を撫でてゆく

濡れた 匂い なくなる 季節の終わり

夕暮しの空 どこか さみしい色をして

そいつを 歩いて 刻む 足音

その 静けさ 胸の痛みを

心の奥のどこか 貼り付いたまま

Capo. 0 オープンG

Capo. 0 1-マールG

秋の心は愁と読むけど

風が袖口 滑り落ちてく

その冷たさに触れるたびに

ふいに誰かの手の温もりを

思い出しては目を閉じる

一つ一つ 灯る 街灯

胸の奥の空

名前呼ぶほど 強くなっている

ただ そばにいてほしい



秋の心は愁と読むけど

夕暮れの色 濃くなった頃

人恋しさが宿ってくる

遠く聞こえる 電車の音が

夜に向かて 伸びてゆく

その響きの中 探してしう

帰ってくるはずない足音

秋の空気は 寄り添ってくる

寂しい隠そうとするたび

そに気付ければ 蘇ってくる

肩越しの誰かの笑い声

人恋しは 孤独の影が

伸びる時に やってくる